

現代語における接続助詞用法のベキヲについて

佐伯 暁子

1. はじめに

現代日本語の助詞ヲは格助詞とされ、接続助詞を認めないのが一般的である。接続助詞のヲが認められない理由として、まず、加藤重広(2013:209)の指摘を確認しておく。

- (1) 現代語の「を」は意味的に接続助詞に相当する働きを持っている場合でも、終止形には承接しない。「の」「もの」「ところ」などの形式名詞を伴い、節を名詞化する要素が介在しなければならない。

(1) は、次の具体例からも明らかである。

- (2) 使い方がわからないのを適当にいじっていたら、ついに動かなくなってしまった。

(加藤重広 2013:207)

- (3) ふつうなら九枚でやめるところを、お菊の幽霊はその夜にかぎって、「十三枚、十四枚」見物人があきれて「もうやめろ、皿の数が多い」すると……

(加太こうじ:寺村秀夫 1978)

(2) は、「使い方がわからないのに」と解釈でき、ヲが逆接を表していると考えられるが、ヲが接続しているのは終止形ではなく「の」である。(3) も、ヲが逆接を表しているようであるが、ヲは形式名詞の「ところ」に接続している。このようなヲは、接続助詞的なヲとして取り扱われることが多い。

ここで興味深いのは、ヲの前接語に「の」「もの」「ところ」などの形式名詞が現れないにもかかわらず、ヲが接続助詞のように働く例が見られるという点である。

- (4) 情勢の変化に合わせて予算も変化縮小させる

べきを、税収を超えて借金しても、国民も政治家も慢性化して無反応になっているように見受けられる。(朝日新聞 2012/1/24)

(4) のヲが承接しているのは、助動詞「べし」の連体形「べき」である。また、「予算を変化縮小させるべき」であるのに対して「予算を変化縮小させるどころか税収を超えて借金している」と解釈することができ、ヲが前節と後節の関係を示していると考えられる。このような例について考えるとき、加藤重広(2013:244)による、次の(5)の指摘は重要である。

- (5) 文語では、「風の強く吹きたるを、風揚げをせんとす」のように用いることはありうるが、これは終止形ではなく、連体形が準体化するものである。現代語でも残存的に見られる。

つまり、文語では、(6)のような連体形に接続する接続助詞ヲの例があり¹⁾、現代語でも準体化した連体形に接続する例が見られる、というわけである。

- (6) おのづからかろき方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、〈自然と軽い身分の方に見えたけれど、この御子がお生まれになって後は、実に特別にお思いになり待遇されたので²⁾〉
(源氏・桐壺)(『日本語文法大辞典』(再版))

現代語における準体化した連体形に接続するヲは、現代語に残存する接続助詞ヲである可能性が考えられるが、これらについて詳細に記述した先行研究は管見の限りない。

そこで本稿では、準体化した連体形に接続し接続助詞のように働くヲ、とりわけベキヲの用法について³⁾、後続述語、前節と後節の関係、意味の観点から観察し、さらに、形式名詞に接続する接続助詞的なヲとの関係について明らかにすることを試みる。

2. 先行研究

現代語における準体化した連体形に接続し接続助詞のように働くヲ、およびベキヲについて論じられたものは見あたらない。ここでは、接続助詞的なヲに関する記述を挙げておく⁴⁾。

先に触れた、(2)(3)のような接続助詞的なヲについて、天野みどり(2011:29)では、先行研究で接続助詞的なヲと捉えられる根拠が次の(7)の3点にまとめられている。根拠となる用例も挙げておく。

- (7) a. 後続に当該のヲ句と直接関係する他動詞が不在である。
 b. 二重ヲ句が可能である。
 c. 2つの事態を「～ノニ・ニモカカワラズ」などで言い換えられるような意味で連結している。
- (8) a. お忙しいところをすみません。
 (加藤重広 2013:208)
 b. 使い方がわからないのを適当に兄のパソコンをいじっていたら、ついに動かなくなってしまった。
 (加藤重広 2013:208)

また、ヲの取り扱いについては、堀江薫(2001:205-208)で、「のを」「ものを」「ところを」が「一語の接続助詞として文法化している」と指摘されている。また、加藤重広(2013:209-210)では次のように述べられている。

- (9) 逆接という機能を持ち、節と節の関係を示す点では「を」を接続助詞と見ることができるが、「の」「もの」「ところ」などの形式名詞に承接しなければならない点では一般的な接続助詞と異なっていることから、「のを」「ところを」のような複合辞として接続助詞に数えるのが穏当である。

このように、「のを」「ものを」「ところを」で一つの接続助詞と捉えるものがある一方で、ヲを単独の助詞として捉えるものもある。『広辞苑』(第七版)では、古代語と現代語における接続助詞ヲの用法について、次のように記述されている。

- (10) (接続助詞) 多く、活用する語の連体形を受

け、次に続く動作・感情の原因・理由などを示す。順接、逆接を決める機能はなく、そのいずれにも用いる。

- ①下の句に対する順接条件を表す。…のだから。…ので。「若宮のいとおぼつかなく露けき中に過ぐし給ふも心ぐるしうおぼさるゝを、とくまるりたまへ」(源氏・桐壺)「藁一束ありけるを夕には是にふし、朝にはをさめけり」(徒然草)
- ②逆接関係を表す。…のに。口語では多く「ものを」「ところを」などの形をとる。「夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ」(古今・夏)「白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちづに染むらむ」(古今・秋)「僧ありけり。本は清かりけるを、年半たけて後、妻をなんまうけたりける」(発心集)「折角で上がったものを、こわされてしまった」「お忙しいところをおいでいただき恐縮です」。(下線は筆者による)

さらに、天野みどり(2011:84)では、「接続助詞的なヲの文は他動詞が不在であるが」、「文脈上臨時に他動詞句の意味が補給され」と考えられることから、接続助詞的なヲは対象を表す格助詞と捉えられている。

以上のように、現代語の接続助詞的なヲについてはかなりの部分が明らかにされているものの、ヲの位置づけについては一致した見解は示されていない。また、準体化した連体形に接続する場合についての詳細な記述は見られない。以下では、準体化した連体形に接続するヲの一例としてベキヲを取り上げ、詳しく考察する。

なお、次の例のように、ベキヲのヲと直接関係する他動詞が後続にある場合は考察の対象外とする。

- (11) 世界に誇る高福祉国家をつくりあげた社民政権の「見習うべきは取り入れ改善すべきをただす」と答弁は明快だ。
 (朝日新聞 1991/10/4)

- (12) そのうえで、政府には、改めるべきを改めるよう望みたい。
 (朝日新聞 1998/1/18)

3. ベキヲの用法

まずは、ベキヲの後続の述語について観察する。

- (13) 駅の改札で「裏が黒か茶色の切符」と書くべきを「黒と茶色の切符をお持ちの方」とある。
(読売新聞 2000/12/15)

- (14) (参院代表質問と答弁の内容)

鳩山氏 自身の疑惑について説明を。

首相 領収書のあて名を書き直した件は本来領収書を取り直すべきを経理の担当者が手間を省いてしまった。

(日本経済新聞 2007/10/4) (括弧内は筆者による補足)

(13) のベキヲのヲには、直接関係する動詞が後続に見あたらない。(14) では、他動詞「省く」が後続に現れるが、「省く」は「手間を」と直接関係し、ベキヲのヲと直接関係する動詞はない⁵⁾。先の (11) の「改善すべきをただす」や、(12) の「改めるべきを改める」とは異なり、後続にヲと直接関係する他動詞が不在であることが見てとれる。また、例えば (13) は、「裏が黒か茶色の切符」と書くべきである」とことと「黒と茶色の切符をお持ちの方」と書かれてある」こととの関係が示されていると考えられる。つまり、ヲの前節と後節は「対照的な関係」(加藤重広 2013: 210)⁶⁾ を示していると考えられる。

このように、ベキヲのヲは節と節の関係を示すと考えられるが、前節と後節はどのような関係にあるだろうか。(13) では「裏が黒か茶色の切符」と書くべきである」、(14) では「本来なら領収書を取り直すべきである」という当為や常識が示されている。そして、後件ではその当為や常識を覆す内容が示されている。(14) や次に挙げる (15)~(17) のように、当為や常識を表す語を伴うこともある。

- (15) 本来なら国として介護報酬をどのように考えるか、政治家が介護現場と真剣に向き合って結論を出すべきを、安い労働力として東南アジアに目を向けて解決しようとするのは、本質的な解決にならないばかりか、東南アジアの人たちに対して失礼ではないだろうか。

(朝日新聞 2009/8/25)

- (16) 盆燈籠は普通に白であるべきを、これは鼠色にぼんやりと点されているのが、一種幽暗の部分誘い出すようにも思われて、盃蘭盆と歌舞伎座と、牡丹燈籠と怪談と、それが結びつけて考えさせられた。

(BCCWJ: 岡本綺堂『江戸っ子の身の上』)

- (17) 国の基準では歩道つきの2車線道路として計画すべきを、地域によっては1車線で造り、必要な場所にすれ違いの出来る区間を設ける。

(朝日新聞 2008/9/25)

(14)~(16) は「本来なら」「普通なら」こうであるべき、(17) は「他の方法なら」こうであるべきという当為や常識を表していると考えられる。このように、当為や常識を表す理由として考えられるのが、当然を表す助動詞「べき」の存在ではないかと思う。ここで注意する必要があるのは、ベキヲに限らず、トコロヲやモノヲといった「べき」を伴わない接続助詞的なヲでも当為・常識を表すという点である⁷⁾。

- (18) 3時40分に授業を終えると、普通なら帰るところを学校新聞の事務所へと向かい、記事の編集、執筆。

(朝日新聞 2017/4/2: 佐伯暁子 2020)

- (19) 運河では五日間かかるところを列車は僅か八時間で走る。

(BCCWJ: 高木誠『わが国水力発電・電気鉄道のルーツ—あなたはデブロー氏を知っていますか—』: 佐伯暁子 2020)

- (20) 内容を考えれば、普通なら視聴率15%だったものを、キムタクの出演でさらに22%も上乘せした感じである。

(BCCWJ: 丸山タケシ『丸山タケシのテレビメッタ斬り』)

- (21) すぐ医者に診てもらったら簡単に治っていたものを、手遅れになってしまった。

(『A Dictionary of Advanced Japanese Grammar』)

(18) (20) では「普通なら~べき」、(19) (21) では「他の方法なら~はず」といった当為・常識を表している。このように、ベキを伴わない形式であっても、当為・常識としての解釈が可能である。つまり、ベキヲは当然を表す助動詞「べき」を伴うことで、当為・常識の意味が強調されていると考えてよいように思う。

4. ベキヲのヲの位置づけ

以上のように、ベキヲのヲは前節と後節の関係を対照的に示す働きを持ち、ヲの前部で当為や常識を表す内容が、後部でその当為や常識を覆す内容が現れると

いう特徴が見られる。この特徴は、ヲが接続助詞であることを示しているものと考えられる。ヲを接続助詞として認めるには、二重ヲ格が成立することも挙げられるが、ベキヲは次の(22)(23)のように二重ヲ格が可能である。

- (22) 早くから被害者対策の重要性を訴えてきた諸沢英道・常磐大学学長(被害者学)によれば「百歩進むべきを、やっと一步を踏み出した」段階だ。(読売新聞 1999/6/5)
- (23) 首相 領収書のあて名を書き直した件は本来領収書を取り直すべきを経理の担当者が手間を省いてしまった。(14)の再掲

ベキヲのヲが対象を表す格助詞であれば後続に対象を表すヲ格をとることはできないが(二重ヲ格制約)、ベキヲと後続の対象を表すヲ格が共起し二重ヲ格が可能であるという事実は、ベキヲのヲが接続助詞であることを示していると言える。

このように見てくることによって、接続助詞的とされるヲは、「の」「もの」「ところ」などの形式名詞に接続し、終止形に接続しないことを理由に接続助詞という判断が排除されてきたが、準体化した連体形に接続するヲについては、古代語の接続助詞の残存と認めてもよいのではないかと考えられる。接続助詞のヲは古代語の名残として連体形に接続する形で現存しているものと捉え直すことができるように思う⁹⁾。

5. 接続助詞ヲと接続助詞的なヲの関係

さて、ここまでベキヲについて見てきたが、現代語の接続助詞的とされるヲとどのような関係にあるのだろうか。接続助詞的とされるヲのうち「ところ」「もの」が前接するトコロヲとモノヲについては、第3節で述べた通り、当為・常識を表すという点でベキヲと共通している。一方、接続助詞的なヲの前接語は形式名詞であるのに対し、ベキヲは助動詞「べし」の連体形「べき」が前接するという相違が見られる。なお、トコロヲについては、佐伯暁子(2020)で詳しく述べたが、状況を表す場合と当為・常識を表す場合があると考えられる⁹⁾。

- (24) 「諸君、諸嬢。本日は多忙なところを、お集まりいただいて、不肖知花一男まことに感謝の念にたえない。(以下省略)

(BCCWJ:野崎六助『夕焼け探偵帖』:佐伯暁子 2020)

- (25) 3時40分に授業を終えると、普通なら帰るところを学校新聞の事務所へと向かい、記事の編集、執筆。(18)の再掲

(24)の「多忙なところを」は「集まる」という動作が行われる状況を表し、(25)の「帰るところを」は「普通なら授業後まっすぐに帰る」という当為・常識を表している。状況を表す場合、トコロヲのヲは格助詞と考えられる。ここで改めて注目されるのは、状況を表す格助詞ヲが普通、形式名詞「中」に付接するという点である。つまり、状況を表す格助詞ヲも接続助詞的なヲも形式名詞に付接するという共通点が見られるのである。

- (26) 豪雨の中を空港に到着した。(杉本武 1986:281)

以上のヲを整理すると、次のようになる。

品詞	格助詞	接続助詞的	接続助詞
意味	状況	当為・常識	当為・常識
前接語	形式名詞	形式名詞	連体形

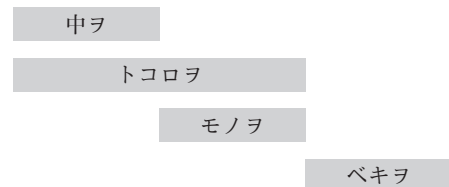


図1 中ヲ, トコロヲ, モノヲ, ベキヲの関係

図1から、状況を表す格助詞ヲ、当為・常識を表す接続助詞的なヲ、当為・常識を表す接続助詞ヲの連続性が見てとれる。状況を表す格助詞ヲと接続助詞的なヲは前接語が、接続助詞的なヲと接続助詞ヲは意味が共通している。このように、古代語の残存としての現代語における接続助詞のヲを想定すると、各用法のヲを連続的に捉えることが可能となる。これまで、接続助詞的なヲの位置づけが難しかったが、接続助詞のヲを想定することで、接続助詞的なヲを格助詞と接続助詞の中間、すなわち、格助詞と接続助詞の橋渡しをするものとして位置づけられる¹⁰⁾。

最後に、ベキヲが古代語の残存として現代語にどの程度見られるのか、という問題について考えておきたい。佐伯暁子(2020)におけるトコロヲの用例調査に

基づき、同じ資料で当為・常識を表すトコロヲ、モノヲ、ベキヲの用例数を調査すると、次の表1のような結果が得られた。調査対象は、『CD-ROM版新潮文庫の100冊』のうち64人の作家による作品と、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のうち1980年代、1990年代、2000年代の書籍(検索ツール「少納言」を使用)、『朝日新聞』(2017年3月1日～2018年8月5日の記事)である¹¹⁾。

表1 当為・常識を表すトコロヲ、モノヲ、ベキヲの用例数

	トコロヲ	モノヲ	ベキヲ
新潮文庫	19	77	0
BCCWJ	56	71	7
朝日新聞	127	15	0
合計	202	163	7

表1から、トコロヲ、モノヲに対して、ベキヲの用例数が非常に少ないことが見てとれる。もちろん、新聞は調査期間を広げれば用例を拾うことができる。試みに、『朝日新聞』1985年1月1日～2020年7月31日の記事で調査すると、ベキヲの用例数は28例である¹²⁾。いずれにしても、ベキヲの用例数は少ないと言える。このように、ベキヲは古代語の残存として現代語にわずかに見られる程度であるということは、注目に値すると言えよう。

6. まとめ

以上、本稿ではベキヲの用法を考察し、接続助詞的なヲとの関わりを明らかにしようと試みた。考察したことをまとめると、次のようになる。

(27) ベキヲの後続には、直接関係する動詞が見あたらない。ベキヲのヲは前節と後節の関係を対照的に示す働きを持ち、ヲの前部で当為や常識を表す内容、後部でその当為や常識を覆す内容が現れる。ベキヲは二重ヲ格が可能である。これらのことから、ベキヲのヲは接続助詞と考えられる。

(28) (27)のように、古代語の残存としての現代語における接続助詞のヲを想定すると、状況を表す格助詞のヲ、当為・常識を表す接続助詞的なヲ、当為・常識を表す接続助詞のヲを連続的に捉えることができる。

(29) ベキヲは、古代語の残存として現代語にわずかに見られる程度である。

連体形接続のヲを古代語の接続助詞の残存と捉え、現代語における接続助詞ヲの存在を認めることで、接続助詞的とされるヲを格助詞と接続助詞の中間に位置づけられるものとして捉えられる可能性を示した。ベキヲの事例のみから、こうした結論を導き出すのは早計であるかもしれないが、接続助詞的なヲが状況を表す格助詞ヲと同じく形式名詞に接続すること、接続助詞ヲと同じ意味を表すことを考え合わせると、連続性を持つヲとして捉えられる可能性があるのではないかと思う。現代語の接続助詞「が」「から」などが終止形に接続することとは視点を変え、古代語のヲとの関連から現代語のヲを見定めることは、ヲの全体像を明らかにする手がかりになると思う。

注

- (6)のような、古代語における活用語の連体形に付接する接続助詞ヲは、近代以後次第に衰えるという(此島正年1973など参照)。なお、天野みどり(2011)では、「古代語の接続助詞のヲの用法とされるものに格助詞性があり、現代語の、「格助詞ヲの周辺的用法としての接続助詞的なヲ」と変わらないという見方も可能である」(天野みどり 2011:87)、「古代語の接続助詞のヲも、対格として解釈できる可能性がある」(天野みどり 2011:107)と指摘されている。この指摘は、古代語の接続助詞ヲの位置づけを考える上で重要な問題であろうと考えられるが、本稿では、従来の研究に従い、古代語の接続助詞ヲは格助詞ヲと異なるものとみなしておく。
- 古代語においては、連体形に接続したヲが格助詞であるか接続助詞であるか明確に区別できない場合があることがよく知られているが、ここでは、『日本語文法大辞典』の記述に従い接続助詞のヲとして解釈した。
- 連体形に付接する接続助詞のように働くヲには他の例もあろうが、本稿では用例数を考慮に入れ、ベキヲを対象とする。
なお、ベキヲは、「べきなのを」「べきものを」「べきところを」の「なの」「もの」「ところ」が省略された形式という見方もあるかもしれない。確かに、例えば(4)では、「情勢の変化に合わせて予算も変化縮小させるべき を/なのを/ものを/ところを、税収を超えて借金しても、国民も政治家も慢性化して無反応になっているように見受けられる。」のように、いずれの形式にも置き換え可能である。しかし、本稿では、加藤重広(2013:244)の(5)の指摘に従い、ベキヲは古代語の残存として現代語に見られる、連体形の「べき」がヲに接続したものと見る立場を取りたい。
- トコロヲとトコロヲのヲの位置づけに関する先行研

- 究の整理については、佐伯暁子(2020)を参照のこと。
- 5) 第4節で詳しく述べるが、(14)は二重ヲ格であることから、ベキヲのヲは対象を表すヲ格ではないと考えられる(対象を表すヲ格は二重ヲ格が不適格となる＝二重ヲ格制約)。
 - 6) 第2節でも述べたように、加藤重広(2013:210)の記述は、「の」「もの」「ところ」に承接するヲに関するものである。なお、堀江薫(2001:207)でも、「ところを」が「前後の節の意味的な対比を示す」ことが指摘されている。
 - 7) 接続助詞的なヲが当為や常識を表すことは、寺村秀夫(1978)、吉川武時編(2003)、田中寛(2004)、天野みどり(2011)でも確認されている。トコロヲが「当為・常識」を表す場合があることについては、佐伯暁子(2020)で詳しく述べた(第5節も参照のこと)。
 - 8) 注1に示したように、天野みどり(2011)では、古代語の接続助詞ヲは対格として解釈できる可能性が指摘されている。本稿では、(27)に示すように、現代語のベキヲのヲを接続助詞と見る立場を取りたい。
 - 9) モノヲについては、別稿を用意したい。
 - 10) 佐伯暁子(2020)では、先に挙げた(24)のようにトコロヲが状況を表す場合、トコロヲのヲは格助詞であると述べた。また、(25)のようにトコロヲが当為・常識を表す場合、トコロヲのヲは接続助詞であると述べた。先行研究では、状況を表す場合は「形式名詞ナカ+格助詞ヲ」、逆接を表す場合は複合辞「トコロヲ」として扱われていたものを、佐伯暁子(2020)では、状況を表す場合と当為・常識を表す場合とで、統一的な説明を試みたのである。しかしながら、本稿での考察を踏まえ、佐伯暁子(2020)の修正を試み、トコロヲやモノヲのヲは単独で接続助詞的に働くものと考えたい。
 - 11) トコロヲの用例数は、佐伯暁子(2020)で収集したトコロヲの用例全303例のうち、当為・常識を表す用例を抽出したものである。モノヲについては、各資料で「ものを、」をキーワードに検索をかけ、「食べものを、」「そのものを、」や、「若いときには一回で理解できたものを、、といささか落ち込んだ。(BCCWJ:吉沢久子『私の気ままな老いじたく』)」のような終助詞の用法の例を手作業により除き、当為・常識を表す用例を抽出した。ただし、モノヲの用例数は概数である。対象外のモノヲが多数検索されるため、検索キーワードを「ものを」ではなく「ものを、」としたためである。なお、BCCWJの1980~2000年の書籍で「ものを」をキーワードにする6676件が検索でき、そのうち調査対象となる「ものを、」は49例、「ものを」は1例であった。これは、当為・常識を表すモノヲは「ものを、」で現れる傾向を窺わせるものであると言える。ベキヲについては、各資料で「べきを」をキーワードに検索をかけ、(11)(12)のようなベキヲのヲと直接関係する他動詞が後続にある場合を手作業により除外した。
 - 12) BCCWJでは、1970年代の書籍に用例が見られない

ため、調査期間を広げても用例数は変わらない。

参考文献

- 天野みどり(2011)「接続助詞的なヲの文―「やろうとするのを手を振った」―」「古代語の接続助詞的なヲの文―古代語と現代語の対比―」「古代語の接続助詞的なヲの文―紫式部日記と徒然草から―」『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 加藤重広(2013)「対象格と場所格の連続性」『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 此島正年(1973)『国語助詞の研究』おうふう
- 杉本武(1986)「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 佐伯暁子(2020)「現代語における接続助詞の用法のトコロヲについて」『論究日本近代語』1
- 田中寛(2004)『日本語複文表現の研究―接続と叙述の構造―』白帝社
- 寺村秀夫(1978)「「トコロ」の意味と機能」『語文』34、同(1993)『寺村秀夫論文集I』くろしお出版所収による
- 堀江薫(2001)「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察―日本語と韓国語を対象に―」『認知言語学論考』1
- 吉川武時(編)(2003)『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房
- Seichi Makino and Michio Tsutsui (2008) *A Dictionary of Advanced Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times.
- 『日本語文法大辞典』(再版) 明治書院
- 『広辞苑』(第七版) 岩波書店

調査資料

- 赤川次郎『女社長に乾杯!』阿川弘之『山本五十六』芥川龍之介『羅生門/鼻』安部公房『砂の女』有島武郎『小さき者へ/生れ出づる悩み』有吉佐和子『華岡青洲の妻』池波正太郎『剣客商売』石川淳『焼跡のイエス/処女懐胎』石川啄木『一握の砂/悲しき玩具』石川達三『青春の蹉跎』五木寛之『風に吹かれて』伊藤左千夫『野菊の墓』井上ひさし『ブンとフォン』井上靖『あすなろ物語』遠藤周作『沈黙』大江健三郎『死者の奢り/飼育』大岡昇平『野火』開高健『パニック/裸の王様』梶井基次郎『檸檬』川端康成『雪国』北杜夫『楡家の人びと』倉橋由美子『聖少女』小林秀雄『モオツェルト/無常という事』沢木耕太郎『一瞬の夏』椎名誠『新橋烏森口青春篇』塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』志賀直哉『小僧の神様/城の崎にて』司馬遼太郎『国盗り物語』島崎藤村『破戒』曾野綾子『太郎物語』高野悦子『二十歳の原点』竹山道雄『ビルマの竖琴』太宰治『人間失格』立原正秋『冬の旅』田辺聖子『新源氏物語』谷崎潤一郎『痴人の愛』筒井康隆『エディプスの恋人』壺井栄『二十四の瞳』中島敦『李陵/山月記』夏目漱石『こころ』新田次郎『孤高の人』野坂昭如『アメリカひじき/火垂るの墓』林芙美子『放浪記』福永武彦『草の花』藤原正彦『若き数学者のアメリカ』星新一『人民は

弱し、官吏は強し』堀辰雄『風立ちぬ／美しい村』松本清張『点と線』三浦綾子『塩狩峠』三浦哲郎『忍ぶ川』三木清『人生論ノート』三島由紀夫『金閣寺』水上勉『雁の寺／越前竹人形』宮沢賢治『銀河鉄道の夜』宮本輝『錦繡』武者小路実篤『友情』村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』森鷗外『山椒大夫／高瀬舟』柳田国男『遠野物語』山本周五郎『さぶ』山本有三『路傍の石』吉村昭『戦艦武蔵』吉行淳之介『砂

の上の植物群』渡辺淳一『花埋み』（CD-ROM 版新潮文庫の100冊）

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」

日本経済新聞記事データベース「日経テレコン」

読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」